

男である私の「自立」

一般的な自立論でなく、「男である私の自立」を語る時、私自身の二度の結婚と離婚とに触れないわけにはいかないだろう。

二度目の離婚をしてから丸三年が経つ。もう一度結婚をし直そうという気は今のところない。「結婚断念」というような思いつめたものを抱えこんでいるわけではない。現在のいわゆる「結婚」という形に興味を失った、と言ってもいいし、現在の「結婚」という形は私には向いていない、と言った方が正確かも知れない。

いわゆる「結婚」という形ではない、もっと自由で、そして自立した形での男と女の関係があってもいいのではないかと思っている。「We」創刊号に宮淑子さんも書いているような「風通しのいい男と女の関係」をつくりだしたいと願っているのかもしれない。

二六歳の時、最初の結婚をした。それは世間的には「同棲」という形で始まった。相手は九歳年下であった。結婚⇨家庭というものが、生活と、意識と、そして性の共有であるとするなら、私はその中で「意識の共有」ということの方に重きを置いた共同生活ということを用意し、「生活の共有」という点を意図的に排除しようと試

吉田 清彦



みた。最低の生活費——家賃、電気代、新聞代など——は私が支払ったが、いわゆる「家計」というものに私は一切金を入れなかった。喫茶バーテンダーという私の職業柄、生活が不規則なこともあつたが、食事はほとんど外食ですませ、家で作るということはあまりなかった。「生活のおい」というものが持ち込まれることを本能的に嫌っていたのかもしれない。

このような生活が五年間続いたある日、彼女の方から「別れ」を宣言した。彼女が二二歳の時である。ありていに言えば、彼女は「生活の希薄さ」に堪えきれなくなったと言つてよい。その前に私たちの間に「意識の共有」がなくなつてしまつていた、と言えるかもしれない。いずれにせよ彼女は「生活の共有」⇨「あたたかい家庭」を求めて新たなスタートを切つた。

ぶざまにも土壇場のところで私も宗旨替えをして「生活の共有」なるものを提唱するという醜態を演じもしてみはしたが、所詮つけやき刃、口先だけのこととして彼女はとりつくしまもなかった。覚悟はしていたものの、いまままで有つたものがある日を境にして

突然無くなるという空白感の中で、ずいぶん感乱し、とりみだしもしたが、もとはといえ身から出た錆、一人暮らしにもどって自分の生活を省みるより他になかった。

学生時代、学生運動に参加し、その間、「女性問題研究会」にもかわり、男女平等や女性の解放をみずから唱えもしてきたが、今考えるとそれは口先だけの空念仏、観念的なところでの空回り、現実の生活における男女関係においてはずいぶんいかげんなものでしかなかったという他はない。それは、頭の中に抱いた思想が、現実の「生活」というものに裏打ちされたものではない、いわば「借り物」の思想でしかなかったという欠点とともに、自分の「男」性に對する追究が全くなされていなかったという致命的な欠陥を持っていた。現実の「生活」に根を持たない観念的な「思想」が、「生活」という現実の中ではあまりにも脆く、「観念」と生活との狭間で、ずいぶんしどろもどろの、ぎこちない生活を送らざるをえなかったと同時に、「男であることの便利さや狡さの上に、半ば無意識に、そして半ばは意識しながら居坐った生活を送ってきたといえる。

こういう反省をしているのは今の私であって、現実の私は二年あまりの独身生活のあとに懲りもせずに二度目の結婚をすることになる。私は三三歳になっており、相手も三〇歳を越えていて、今度はお互い充分な人生を経ての分別ざかり、お互いの持ち味を生かした自由で自立したものの同士の共同生活が営めるものと勝手に思い込んでいた。ところがまずスタートで失敗した。

最初の結婚が同棲という形のままで幕を閉じたことへの負い目も

あり相手の希望もいれて結婚式は二人だけで挙げたものの、披露宴は親戚、友人を招き、盛大にとりおこなった。さまざまな事情もあり披露宴は都合三度もおこなうという徹底ぶり、これはいわば世間というものの妥協・手打ちの儀式であったが、これがそもそも間違ったの始まり。世間と手打ちをした「結婚」Ⅱ「家庭」というものは、単に愛し合う者同士だけの生活・意識および性の共有体というものではなく、二人それぞれに抱えている世間Ⅱ社会というのが我が物顔に侵入するという実に猥雑で煩瑣なものだということに今さらながら気づかされたが、今となっては後の祭り。ここで例え形式的にはいえ一度は引き受ける気になっていた世間を引きうけてしまっただけのしぶとさが私にあれば何とかなっただろうが、私の中から少しずつ気力が失われていった。一個の伸びやかな存在であったはずの彼女が、世間から公認された「妻」という役割を演じようとすればするほどその分だけ私は「夫」を演じることを強要される。「夫」である前に一個の自由で伸びやかな存在であろうとする自分と「夫」という役割とが小さな軋轢を生じる時、世間と、世間という錦の御旗を手にした「妻」は情容赦もなく「夫」であることを何にもまして強要し、自由で伸びやかな存在であろうとする私は世間の目の届かない所でブツブツと口籠るしかなくなる。

このようにして私は、「家庭」の中で伸びやかさを失っていき、同じようにして彼女もまた、「妻」であることを演じようとするほど、自分自身の伸びやかさを失っていくようであった。「世間」というとらえどころがないにもかかわらず、闊然とした強制力を持つ仕組みの中で、「夫」という役割を演じ続けることに自信もなく、またとめどもなく自分が自分でなくなっていくという恐れ

なかで私は再び「離婚」を決意した。同じような不安を抱いていたのであろう、彼女も一も二もなく同意した。このようにして私の二度目の結婚はわずか一年にして幕を閉じた。

世間とあれほどまでに仰仰しい手打ちをしてのスタートであったが故に、当分の間は世間との間にずいぶん気まずい思いや気おくれも感じたが、再び取りもどした自由で伸びやかな空気の大切さに比すれば、それらのことはともかくも耐えていけるものであった。そしてその時私は思った。「あのよ様な形で結婚はもう二度とすまい」と。「結婚断念」というよ様な、悲愴さを伴ったものではなく、「私には「結婚」は向いていない」とでもいうよ様な、憑きが落ちたよ様なサバサバとした感覚だった。

「仕事が趣味だ」とツツパツて、格別な趣味も持たず、別の事情もあり仕事以外の交友関係を大学卒業以来避けてきた私ではあったが、一年間という、短かいといえは短かく、長いといえはとてつもなく長く感じられた「不自由」な時空から解放されたその反動で私は、あらゆる機会をとらえてさまざまなサークルにとびこんでいった。「久しぶりに」一人になって、ありあまる自由な時間を持てあましていたのかもしれないし、自分の可能性を仕事以外のいろいろな場所のためししたいと考えたのかもしれないが、とにかく自由な時間を自分の思い通りに伸び伸びと思おう存分に使ってみたいという欲求から行われることと思う。「森はなと児童文学を語る会」「まないたの会」「戦争を起させない市民の会」「それいゆ——女性問題を語る会」等々、興味があれば加古川にでも、淡路にも出かけてゆく。このようにして出会ったものに「ひとり歩きの会」がある。一

昨春秋、「男・女の自立と個の尊厳」を主な趣旨とする「ひとり歩きの会」の発起人に名を連ねないかという誘いがあり、その時は軽い気持ちで応じたのだが、その後の二年間の会活動の中で、私の心の中であいまいなままにされていったものが、少しずつ言葉になり、形になり、行動になっていった。

それまで私は、「世間」との距離感をはかりかねて、意識の中では「世間」を軽んじながら、実際の生活の中では「世間」に未練を残し適当な妥協を重ねながら暮らしていたのだが、それは、結局は「世間」という土俵の中でもがいていたにすぎなかった。ところが「ひとり歩きの会」の会活動の中で会に集まる人たちの生き方を見回してみると、「世間」というものにとらわれずに、「世間」を気にせず、実にあっけらかんと生きている人の多い事に気づかされた。私の中で何かがふっきれていった。

とりあえず「世間」を気にしないことだ。そのためには、世間の価値基準や規範にとらわれないで、それとは別のところに、自分の価値基準・行動基準をつくりあげることがまず先決である。そのうち「世間」の仕組みを見つめなおす。私のそれまでの生き方は方法が逆だった。世間にとらわれすぎていたようだ。このようにして私の自立が——意識的な自立への旅が——始まったと言っている。

男・女に限らず自立とは、生活レベルにおいては、とりあえず「世間」からの自立である。世間の規範や価値基準、あるいは道徳や倫理、約束などからフリーでいられること、あるいは距離を置いて生きられること。そのためには、世間の規範や価値基準とは別に、自分の価値基準や規範・倫理を己れの中に形づくること。それはとりもなおさず、「世間」という価値基準を通して私を見るの

ではなく、私のよって立つ位置から「世間」を見直すこと。

さてそのように自立の根拠を見すえて、結婚というものを考えてみると、今さらながら私には「結婚」Ⅱ「家庭」というものに興味がない。「結婚」Ⅱ「家庭」というものは、世間的な価値基準に埋没した、なれあいの構造でしかない。そしてそれは旧態依然とした男女の性別役割分業論に与えられた、もたれあいの関係で、お互いの人間的成長なしでも成り立つ。

さてそれでは、私が希求する好ましい人間関係とは。前提として各個人が、精神的に自分の領域（領分）を持つこと、すなわち自立がまず失決。自分が自分の領域を持つことの大事を主張することは、とりもなおさず相手も相手固有の領域を持つことを認めることである。このような人間同士のつきあいにおいては、自分の生き方を主張することはすなわち、相手の生き方を認め、おもしろい、いたわることにつながる。あるいは相手の領域を侵さないことにつながる。それがたとえ「夫婦」であろうとも、親子であろうとも、好ましい人間関係には以上のことが前提となる。

となると、たとえば夫婦が同じ屋根の下に住み、同じ空間をのべつ幕なしに共有しあう結婚あるいは同棲というのは、よほどの緊張関係もしくは工夫がなければ難しい。どうしても生活領域および精神領域を侵しあうことになり、お互いの個人として自立は実質的に不可能となる。かといって家庭の中では譲り合い（すなわち侵し合い）、家庭の外でそれぞれが自分の時空を持つといういわば「二重生活」の主張も、二重人格的でごまかしが感じられる。

とすれば、とりあえず好ましい結論は、「別居結婚」でしかない。いわば「通い婚」である。別のところで書いたことがあるのでここ

で詳しくは述べないが、要するに、「お互いの精神と生活とを支配しあわないで、二人が会いたい時にだけ会い共通の時間を持ち、刺激、吸収しあい、またいたわりあう。そしてその時間以外はお互いがそれぞれの場所で自分に個々の人生を全力を尽して生きる。そして再び二人の時間を持つ」というのが、私の「別居結婚」Ⅱ「通い婚」の主張である。

私は今、自分の実際の生活の中で不完全ながら「別居結婚」の試みの生活を始めている。「世間」から公認され、戸籍によって保証されたものではないので、いつ何時突如としてその幕が降ろされるかも知れないという緊張や不安もあるが、それは相手をそして自分を信頼するしかない。自立した者、あるいは自立しようとする者同士をつながりであればそれは避けて通れぬ緊張であり、また不安である。緊張をなくした、もたれあいの人間関係でしかない「結婚」Ⅱ「家庭」を拒否した人間が背負うべきものであり、それもまた自由の一部である。

孤独という現代人が抱える最大の病いも克服しなければならぬが、たとえ「結婚」していても各人はもともと孤独な存在なのである。それを「家庭」あるいは「世間」というオブラートでくるんでいるだけであって、喉ごしはよくても、結局体内に入れば同じように胸中・腹中をかき乱す。孤独によく耐えうるということも自立の条件である。

ともかく、自立して生きるということは、自分の人生の主人公は自分であるという確認を自分に対して、また相手の人生に対してもするところからスタートする。

最後になるが、男と女が共に自立し、一人で生きていくなり、また自立した者同士が共に相携えて助けあい共同生活を送るなりするうえで、男が食事や洗濯などの自分の身の回りのことを自分で処理する能力を身につけることは最低かつ基本的な条件である。私は喫茶パーテンドーという職業柄、買物や食事のことは全く苦にならないし、洗濯も洗濯機を回せばすむことであるが、残念ながら裁縫の能力は無きに等しい。無器用なボタンつけ程度のことしかできない。こんなことなら、小学校の時の家庭科の運針についても真剣に習っておくべきだったと後悔もするが、その頃はまさか今のような生き方をするとはいちろん想像だになかったので後悔しても始まらない。スウェーデンの最近の学校教育指導要領にあるように「学校は、男子と女子が将来社会において同じ役割を果たし、父親になるという用意は母親になるという役割と同じように大切にあら

人間の自立とは

男に甘いあなたに

私たち日本人一人一人の精神構造の中には滅私奉公という怪物がどかんと大きな座を占めているのではないだろうか。とりわけ女の場合は「婦徳」などを強いられて、がんじがらめになってきまし

り、また職業を持つことは、女子にとっても男子が職業に興味を持つと同様に大切であることを前提とし、「一番々瀬康子『福祉―問われる原点』創元社より）、従来の男女の役割分業を超えて、「食衣住・育児に関する基礎的な知識はもとより、木工、ミシン、料理などの実習、買物物の知識から生活協同組合運動への認識、住宅のあり方から都市計画への学習」にいたるまで、「暮らしの中から社会をとらえる視点」を養う男女共修の家庭科教育がなされ、「一人一人の自立とそのうえで『の連帯』という真の意味での教育が日本でもなされれば、私たちのあとに続く世代はもっと自立した暮らしと、そして自立した者同士の連帯としての夫婦関係や親子関係、そしてあらゆる人間をスムーズにつくり出せるものと思われるのだが（引用は全て前掲書による）。

（ルポライター）



相良 弓子

た。

そして、その結果として今、自分の抑圧状況を問題にする力さえ奪われているといっても過言ではありません。